

カルテの余白に

老人看護専門看護師として神戸海星病院(神戸市灘区)で働く西山みどりさん(44)は、認知症患者と接する機会も多い。患者や家族の立場になったケアとは何かを考え続けているという。

母を看病する娘

△苦い体験があった▽
14年前、海星病院で働き始めた頃です。認知症の母親を看病する女性がいました。「私がわかる?」と何度も母親に呼びかけるのを見かね、「そんなに話しか

西山みどり 神戸海星病院看護師長 田

認知症患者 心通わせて

くらし 健康・医療

「くらし健康・医療」は日曜日に掲載します



スタッフとの打ち合わせでは、「患者さんの気持ちになってみるのが大切」などと話す西山さん(中央)(神戸海星病院で) 田井田直也撮影

けたら、お母さんもしんどいと思いますよ」と言つと、「母が娘である私のことをわからなくなるのがどんなにつらいか、わかりますか」とにらまれました。退院まで口もきいてもらえませんでした。でも、その時、私は女性のつらさがわからなかったんです。

家族の気持ち

△海星病院をいったん退職し、老人看護専門看護師を目指して入学した兵庫県立大大学院では認知症を修士論文のテーマに選んだ。女性の気持ちを理解したかったからだ▽
5人の認知症患者と、一

緒に暮らすそれぞれの家族に聞き取りをしました。母親を介護していたある女性は、家で一人きりの時、孤独を感じ、泣いたのですが、母親がお茶を入れてくれたそうです。「私の悲しみをわかってくれたんですかね。気持ちがあまりました」と話していました。

先の見えない日々でも、光の差す日はある。認知症患者を抱える家族の気持ちは多様だと、気づかされました。

「知らせないで」

△大学院を卒業後、海星病院に復職した。認知症患者と家族の気持ちが少しずつ

分かるようになった▽

80歳代の夫婦で、奥さんが認知症と診断されました。ご主人は家事一切を奥さんに頼っていました。が、「嫁に出た長女に心配をかけたくない。知らせないでほしい」とかたくなでした。

でも、放っておけばご主人が倒れてしまうと思いが、「頼れる範囲だけでも、娘さんをお願いしましょう」と説得しました。「呼んでくれて良かった。父は母と心中したかもしれません」という長女の言葉に、私も救われました。

相手の目を見て

△患者は見ている▽
病院のスタッフにはいつもこう言っています。「外国で、見知らぬ人が話しかけてくる。だけど、何を言っているのかわからない」。

認知症の患者さんと同じような状況で、不安でたまらないでしょう。自分の年齢や名前を覚えていない患者でも、「お元気ですか」「体調は?」と問いかけると、答えてくれる場合もあります。相手の目を見て意思を確認することが大切です。患者さんは見えています。

支えになれる

△今なら理解し合える▽
83歳になる私の父も認知症を患っています。私を「神戸の人」と呼びます。頭では理解できても、寂しく思う時もあります。でも、父の心に触れ、支えられることは色々あると思います。14年前のあの女性の問いかけに今なら、「わかります。おつらいですね」と答えられる気がします。(聞き手 富山優介)